高校における古典入門の指導

——単元「古文に親しむ」の実践を中心に——

松田久理美

はじめに

古文の学習に入る前に、「私にとっての古典」というテーマで作文を書かせたところ、「昔の人がどのようなことを考えていたかということは、私には関係ない」と書いている生徒があった。このような生徒に、少しでも古典を読む楽しさを味わわせ、古文を学習する意味について考えさせたいという思いが、私をとらえた。

それとともに、入門期の指導にあたって、私には学生時代からのもう一つの願いがあった。それは、わかりやすい文法指導を行い、文法嫌いによる古文嫌いを作らないということである。

こうした願いから出発して試みたささやかな実践について、報告させていただく。

一、入門期における古文指導のねらい

先に述べた願いから、ねらいとして次の四点を挙げた。

1、古文の音読ができるようにさせる。
2、古文学習への興味・関心を喚起させる。
3、古典作品への親しみを感じさせる。
4、用言の活用について理解させる。

二、単元「古文に親しむ」の編成

教材編成は、次の通りである。

「十訓抄」㈠安養の尼の小袖　（教科書教材）
古文入門　（プリント）
「十訓抄」㈡大江山の歌　（プリント）
古典文法の学習㈠ことばの単位と品詞分類（プリント）
古典文法の学習㈡活用と活用形（プリント）
古典文法の学習㈢動詞活用の種類（プリント）
「十訓抄」㈢寒翁の故事　（プリント）
「平家物語」㈠祇園精舎　（教科書教材）
古典文法の学習㈣動詞の音便と係り結びの法則（プリント）

『平家物語』㈠忠度の都落ち　（教科書教材）
『平家物語』㈡木曽の最期　（教科書教材）
古典文法の学習㈠補助動詞と敬語（プリント）
古典文法の学習㈡形容詞と形容動詞の活用（プリント）

教材編成、プリント作成上、次のことに留意した。

1、『十訓抄』はすべて、本文の左に傍注をつけたプリントを用意した。特に、最初の教材「安養の尼の小袖」では、口語訳をさせるよりも、まず内容のおもしろさを味わわせるために、古語辞典を引かなくても内容が理解できるような細かい傍注をつけた。（資料1）

2、「古文入門」及び「古典文法の学習」については、書き込み式の学習プリントを用意した。その際、用例は既習教材から拾い、内容理解と文法学習との係わりを密にするよう努めた。

例えば、「古文入門」の学習プリントでは、「文語と口語」「歴史的かなづかい」等について理解させるために、先に学習した「安養の尼の小袖」から用例を拾っている。（資料2）

3、『十訓抄』の三教材と古典文法の学習プリントを組み合わせ、文法学習とからませながら、徐々に古語辞典を引くことに慣れさせるよう段階を設けた。

「古文入門」の「古語と古語辞典」という項目で、どのような場合に古語辞典を引いても載っていないという事態が生じるのかを説明し、さらに、現代語との比較から古語を理解させ、〈練習〉として古今異義語を辞書で調べる機会を設けた（資料2）後、次の教材「大江山の歌」では傍注を減らし、重要古語には＊印を付けるとともにプリントの左下に抜き出して示し、学習者が自分で辞書を引いて意味を調べるようにした（資料3）。また、動詞の活用について学習した後、教材「塞翁の故事」では傍注をさらに減らし（資料7）、傍線を付した語の意味を調べる過程で、「動詞については終止形に直してから辞書を引く」という習慣をつけることをねらったプリントを用意した（資料8）。この作業で、文法学習が読解学習に生かされることにも気づいてほしかった。

4、古典文法については、機械的に暗記させるのではなく、体系ができるまでの筋道を理解させるようなプリントを作った。例えば、「古典文法の学習㈠―活用と活用形―」（資料5）では、まず「活用」について英語との違いを考えさせ、次に、活用形が四つではなく六つであることの理由、未然・連用・終止という活用形の名称の由来について理解させた。その際未然形と已然形の違い、口語の仮定形が文語では已然形と呼ばれる理由を説明し、「なぜなのか」ということを明らかにしていくよう努めた。「古典文法の学習㈡―動詞活用の種類―」（資料6）についても、四段活用、上一段活用という名称の由来を理解できるような書き込み式のものにしてある。

三、単元「古文に親しむ」の展開

先に述べた四つのねらいを達成するために試みた授業展開は、以下の通りである。

『十訓抄』

安養の尼の小袖　〈二時間〉　（資料1）

1、音読に慣れさせる。
　範読の後、短く区切りながら後について音読させる。
2、傍注を利用しながら、登場人物及び会話主を押さえさせる。
3、登場人物（安養の尼上）の人物像をとらえさせる。

古文入門　〈二時間〉　（資料2）

歴史的かなづかい及び古語に対する理解、古典文法学習への導入を図り、プリントで学習させる。

大江山の歌　〈二時間〉　（資料3）

1、音読に慣れさせる。
2、重要古語の意味を辞書で調べさせる。
3、登場人物及び会話主・動作主を押さえさせる。
4、主題をとらえさせる。

古典文法の学習㈠～㈢〈四時間〉（資料4～6）

プリントの空欄に書き込みをさせながら、ことばの単位、動詞の活用等について理解させる。

塞翁の故事　〈二時間〉　（資料7・8）

1、音読に慣れさせる。
2、傍線部の語について、古語辞典で意味を調べさせる。（動詞を終止形に直す練習も兼ねる）
3、話の結末を予想させる。

『平家物語』

祇園精舎　〈二・五時間〉

1、音読に慣れさせる。
2、てびきを利用しながら空欄を補い、口語訳を完成させる。
　（資料9）
3、内容及び表現上の特徴を理解させる。
4、冒頭部分を暗唱させる。

古典文法の学習㈣〈〇・五時間〉（資料10）

「祇園精舎」における重要な文法事項として、動詞の音便、係り結びの法則について取り上げ、理解させる。

忠度の都落ち　〈二時間〉

1、自分の力で内容を読みとらせるために、古語の意味をあらかじめ調べさせ、課題について考えさせる。（資料11）
2、音読させる。
　範読の後、各自で練習させ、三名に指名する。
3、内容を理解させ、忠度の人物像をとらえさせる。

木曽の最期　〈三時間〉

1、口語訳付きの資料（資料12）を配布し、木曽義仲（傍線部）及び今井四郎（波線部）の会話や行動から、二人の心情を考えさせる。（資料13）
2、1の個人学習をもとに班で話し合わせる。
　この際、次の「班学習のために」を配布した。

木曽の最期　班学習のために

話し合いの進行及び記録について

① 司会者と記録係を一名ずつ決める。

② 司会者の仕事

1、登場人物の心情について各自考えてきたことを、全員に発表させる。

2、意見の相違など、問題点があれば討議させる。

3、班としての考えがより深まるように、付け加える点があれば発表させ、まとめる。

③ 記録係の仕事

1、各自が最初に発表することがらは記録する必要はない。（個人記録を提出してもらえば、各自の意見はわかるため）

2、話し合いの過程を記録する。（誰がどのようなことを発言したか）

3、班としての結論が出たら、それに赤丸をつけておく。

④ 全員の作業

1、自分の意見をわかりやすく説明する。

2、自分と異なる意見が出たら、すぐにメモをとる。

3、話し合いの途中で（他の人の意見を聞いて）、何か思いついたり、自分の考えが深まったりしたら、赤ボールペン等で記しておく。

⑤ 一つの班において、同時に二人が発言してはならない。一人が発言しているときは、他の人は静かに聞く。

記録係には「班学習記録」用紙、また全員に「班学習個人記録」用紙を渡した。

〈国語Ⅰ〉木曽の最期　班学習記録（　月　日）

（　）組（　）班　司会者（　）記録係（　）

班員（　　）

発言者	発言内容	発言者	発言内容

〈国語Ⅰ〉木曽の最期　班学習個人記録

（　）組（　）番　氏名（　　）

人物の会話・行動	他の人の意見メモ欄（自分の意見と異なるものをメモする。）	気づきメモ欄（新しく思いついたことがあればすぐに記す。）
義仲 ①		
今井 ①		
今井 ②		
今井 ③		
義仲 ②		

記録用紙はすべて提出させ、班学習の取り組み方について評価し返却した。

3、各班の結論をプリントにし（資料14）、補足説明をさせながら、義仲と今井の強い絆について味わわせる。

4、『平家物語』のまとめとして、忠度、義仲、今井の中から好きな人物一人に宛てて手紙を書かせる。

提出された手紙は、後にクラスごとに文集にして配布した。

古典文法の学習㈤　〈一時間〉　（資料15）

「忠度の都落ち」「木曽の最期」における重要な文法事項として、補助動詞と敬語について理解させる。

古典文法の学習㈥　〈一時間〉　（資料16）

形容詞と形容動詞の活用について、『平家物語』から用例を抜き出し、下に続く語から、それぞれの活用形を考えさせた上で、帰納的に活用表を作らせ、どのようにして活用表ができたのかを追体験させる。

四、単元「古文に親しむ」の成果と課題

1、「古文の音読ができるようにさせる」というねらいは、歴史的かなづかいに注意して読めるようになったという点では達成されたように思う。しかし、古典のもつ流麗なリズムを体得させることができたかというと、はなはだ疑問である。「祇園精舎」の暗唱テストは休憩時間等に行ったため、生徒の生き生きとした表情を見ることができた半面、大勢の聞き手を意識して音読する力を育てることにはならなかった。次の段階として、読みとった内容を朗読・群読に生かすという機会を設け、真に古文を音読する力を育てるよう心がけたい。

2、古文学習への興味・関心をもたせるために、教科書や文法書に頼るのではなく、プリントを使って作業をさせながら授業を

進めたのだが、プリントの作り方をもっと工夫しなければならない。「木曽の最期」では、人物の心情を考える宿題を課したが、自分でやらずに他の生徒のものを写した生徒がいる。取り組みやすく、意欲をそそるような形式のプリントを用意する必要がある。また、古典文法学習への導入として、文語による唱歌を扱った（資料2）ことは成功だったが、古文入門、古典文法の学習プリントの中には、指導者の説明に終わってしまい、生徒を退屈させるものもあった。生徒自身が考え、活動できるようなプリントに改善していかねばならない。

一方、古文の入門期に班学習を取り入れたことは、受け身の古文学習から主体的に考える古文学習へと生徒の意識を転換させることができたように思う。今後、班学習の内容をより充実させるために、的確な助言指導のあり方を探っていきたい。

3、『平家物語』に登場する人物は、生徒の心をとらえたようである。次に、生徒の登場人物に宛てた手紙文を紹介させていただく。

平　忠度様へ　一年六組

私は、あなたが武士として生まれてきたことを不幸に思います。和歌を愛し、そのすぐれた才能を持っているのに、じゅうぶん発揮できなかったから。でも、私は、たった一首で、しかも「よみ人知らず」で撰集に歌が入ったことを、作者のように残念には思いません。あなたの歌が、歌人として名誉な撰集に入ったのですもの。初めに「あなたが武士として生まれてきたことを不幸に思います……」と、書いたけれど、よく考えてみれば、それは、よかったことなのかもしれません。平家に生まれてなかったら、俊成の教えをうけることもできなかったでしょうし、撰集に入ることも、ましてや和歌というものに出会うことさえもなかったかもしれません。そんな人生の中で、あなたは、武士としての誇りをすてず、いさぎよく、そして和歌を愛して死んでいったのだから、くいをのこすことは、ないでしょう。八百年も昔に生きたあなたに、私は、また新しい生き方を教えられました。

今井四郎様　一年六組

私は、あなたのとった行動をすばらしいと思いました。あなたと木曽殿が御乳母子だったこともあるとは思いますが、それでも他人は他人、心ない人なら、裏切って逃げたでしょう。

木曽殿が弱音を吐いた時、本当はあなたも同じくらい心細くて、疲れていたと思います。

それをおさえて、木曽殿を励ましたのは、本当に、相手を慕ってないとできなかったでしょう。

私は、昔の風習というか、あの自害しなくてはならないといった感じを憎らしく思います。これがなければ、あなたも、木曽殿も、逃げることができたかもしれないからです。

でも、今さらしかたないですね。

私は、こんな平和な時代に生まれて、正直ほっとしています。

でも、あなたのような気持ちは、持ちたいし、また、持ち続けていきたいと思います。

「木曽の義仲殿」への手紙　一年一組

前略、天国でいかがお過ごしでしょうか。

私は、あなたの人情深い心に魅かれ、筆をとりました。今まで、他の古典に出逢ってもどこか縁遠い人という感じで、ほんの少しの同情さえも生まれなかった始末です。

ところが、あなたに出逢ってから、いつの時代にも、人情というのは同じなんだな、と今さらのように感じられました。

私はあなたから、古典の深さ、人の優しさを教えられ、今井四郎さんは、きっと、もっと多くの大切な事を教えられたから、あそこまでついてゆけたのだと思います。だから私は、あなたの死は決してむだではなかったと思います。あなたの一生は、戦、戦で、あわただしかっただろうと思います。

その分、どうか、天国でやすらかに、お過ごし下さい。

どこかで、又、いつか、あなたの様な人にめぐり逢えることを、楽しみにしています。

木曽義仲様へ　一年六組

木曽義仲様は、とてもお疲れになっていたようですね。鎧が重く感じられるなんて武士らしくないですが、やっぱり武士も人間なんでしょう。今井四郎とは乳兄弟でとても硬い絆で結ばれていたようで、お互いが信じ合っていましたが、普通、武士といえば、自分の出世のために身内の者や、自分の主人まで殺すことさえあることに比べれば、あなた方二人の親愛と信頼の深さに感動を覚えています。

あなたを思う今井や、それに呼応して今井に気づかうあなた方二人の会話のやりとりは本当に、ただただ心を傷めるばかりです。

そして、いよいよあなた方の最期が来た時二人の親愛の深さから一緒に死のうとしたけれど出来ませんでしたね。でも、私もあなたは後悔してないだろうと思います。それは、今井の奮戦する姿を見たのだし、何といっても今井のあなたを思う気持ちには底知れぬ、深い感動を覚えたに違いないからです。

時代を越えてあなたに会えて良かったです。

傍線を付したところから、彼らが『平家物語』の学習を通して、古典を学習する意味を見いだしていることがうかがえる。しかし、登場人物を否定的にとらえた生徒もおり、古典作品に親しませるというねらいからすると、こういう生徒に対する後の取り組みについて考える必要がある。文集によって他の生徒の感想を知ることで、登場人物に対する見方を広げてくれることになればと思う。

4、古典文法について、動詞の活用には時間をかけたため、ほとんどの生徒が理解したようである。それに比べ、係り結びの法則や形容詞・形容動詞はあっさりと流してしまった感があったが、やはり理解度は低かった。覚えこませる指導をあえてしなかったが、ある程度、習得したかどうかを確認するべきであった。しかし、「文法は嫌い」という声が直接耳に入ってこないことは救いであり、筋道をたてて文法というものを考える姿勢がみられることも収穫である。

一年目の実践で、多くの課題をかかえているが、諸先生の実践に学びつつ、少しずつ克服していきたい。

資料1

〈国語Ⅰ〉 古文に親しむ （ 月 日）

十訓抄 (一)

安養の尼の小袖

1 横川の恵心僧都の妹、安養の尼上のもとに、強盗入りて、ある

2 ほどの物の具、みな取りていでければ、尼上は紙衾といふも

3 のばかり引き着てゐられたりけるに、姉なる尼のもとに、小尼

4 上とてありけるが、走り参りて見れば、小袖を一つ落としたり

5 けるを取りて、「これ落として侍るなり。奉れ」とて持て来

6 たりければ （以下略）

資料2

〈国語Ⅰ〉 古文に親しむ （ 月 日）

— 古文入門 —

1 文語と口語

（ ）……古典作品に使われていることば。

主の心ゆかぬ物をば、いかが着るべき。

（ ）……現在使っていることば。

持ち主が納得しない物を、どうして着ることができようか。

2 歴史的かなづかい

（ ）……文語文に使われているかなづかい。

平安時代のかなづかいをもとにしている。

（ ）……口語文に使われているかなづかい。

原則として発音どおりに書く。

（例外 助詞「を」「は」「へ」）

○ 五十音図

（歴史的かなづかいで）

	◎									
	▲		▲							
	▲		▲							
	▲									

歴史的かなづかい	現代かなづかい
横川	
恵心僧都	
尼上	
強盗	
いふ	
ゐられたりける	

◎印のついた行・▲印のついた段の文字の表記に注意する。

○歴史的かなづかいの読み方

(1) 語頭以外のハ行音を、原則として「ワ・イ・ウ・エ・オ」と発音する。

例　横川(よかは)→よかワ　尼上(あまうへ)→あまうエ
言ひければ→言イければ

(2) 「ゐ」「ゑ」「を」はそれぞれ「イ」「エ」「オ」と発音する。

例　恵心(ゑしん)→エしん　ゐられたりける→イられたりける

(3) 「ぢ」「づ」は、それぞれ「ジ」「ズ」と読む。

例　僧都(そうづ)→そうズ

(4) 促音便(そくおんびん)の「つ」は小書きにしないが、現在の促音便と同じ読み方をする。

例　十訓抄(じっきん)→じッきん抄

(5) 連母音の場合、母音が「アウ・イウ・エウ・オウ」となる語は、それぞれ「オー・ユー・ヨー・オー」と発音する。

例　強盗(がうだう)→ゴードー　いふ→(イウ)→ユー

〈練習〉「いろは歌」の中で、現代かなづかいと異なる表記の左側に傍線を引き、それを現代かなづかいに書き改めてみよう。

いろはにほへど　ちりぬるを
わがよたれぞ　つねならむ
うゐのおくやま　けふこえて
あさきゆめみじ　ゑひもせず

③ 古語と古語辞典

古語辞典に載っていない!!

① 単語のくぎり方をまちがえた場合
「心ゆかぬ」は「心ゆか」＋「ぬ」であるから、「心ゆかぬ」で引いても出ていない。

② 活用語を言い切りの形（終止形）に直さなかった場合
「心ゆか」は、終止形の「心ゆく」で引かないと載っていない。

③ かなづかいをまちがえた場合
「おはす」や「給ふ」を「おわす」「給う」でさがすと載っていない。

古文に出てくることばを、現代語との比較という点からとらえると、次の三種類に分けられる。

昔も今も同じような意味で使われていることば	強盗、入る、取る　落とす　悪(あ)し	⇩辞典を引く必要なし。
昔も今も使われているが、昔と今とでは、用法に異なる点があることば（古今異義語）	紙衾(かみぶすま)、いかが、気色(けしき)、さながら	⇩まちがえて理解しやすい。要注意!!
昔は使われたが、今では使われないことば	侍り、よも、とし　おはす、給ふ	⇩辞典で調べるしかない。

〈練習〉次の語を古語辞典で調べ、現代の意味と比較してみよう。

あした		さうざうし	

ありがたし	にほふ	
うつくし	はづかし	
おどろく	やさし	

4 古典文法を学ぶ前に

ふるさと

うさぎおいし　かの山
こぶなつりし　かの川
夢は今もめぐりて
忘れがたき　ふるさと
志を果たして　いつの日にか帰らん
山は青きふるさと　水は清きふるさと

カチューシャ

リンゴの花ほころび
川面にかすみたち
君なき里にも
春はしのびよりぬ

花さかじじい

うらのはたけで　ポチがなく
正直じいさん　ほったれば
大ばん小ばんが　ざくざくざくざく

。「おいし」は「美味し」か。
。「つりし」は「釣り師」か。
。帰る意志があるのか、ないのか。
。春はしのびよったのか、しのびよらないのか。
。正直じいさんは、掘ったのか、まだ掘っていないのか。「ほったらば」にすると、意味がどう変わるか。

資料3

〈国語Ⅰ〉古文に親しむ　（　月　日）

十訓抄（二）

大江山の歌

1 (1)いつみしきぶ和泉式部、(2)やすまさ保昌が妻にて、(3)たんご丹後に下
2 りけるほどに、(4)京に歌合ありけるに、
3 (5)こしきぶのないし小式部内侍、歌よみにとられてよみけ
4 るを、(6)さだよりのもうなん定頼中納言、たはぶれて、小式
5 部内侍、(7)つぼね局にありけるに、「丹後へつ
6 かはしける人は参りたりや。*いかに心
7 もとなく*おぼすらん」と言ひて、局の
8 前を過ぎられけるを、御簾よりなから
9 ばかりいでて、わづかに(8)なほし直衣の袖をひ
10 かへて、
11 (9)大江山いくのの道の遠ければ
12 まだふみもみず　天の橋立
13 とよみかけけり。（以下略）

(1) 平安時代中期の女流歌人。
(2) 藤原保昌。
(3) 今の京都府北部。
(4) 歌人を左右に分けて、同じ題の歌をよませて、その作の優劣を競わせ、判者が判定し、勝負を決した。
(5) 和泉式部の娘。
(6) 藤原定頼。
(7) 女官の居室。
(8) 貴族の平常服。
(9) 今の京都市右京区大枝にある山。

いかに　心もとなし
おぼす　なから
あさまし　おぼえ

資料4

〈国語Ⅰ〉古典文法の学習 (一) (　月　日)

— ことばの単位と品詞分類 —

1 ことばの単位

(　)……一つのまとまった思想や感情を表す一続きのことば。

小式部これより歌よみの世におぼえいできにけり。

(　)……文を実際のことばとして不自然でないように、できるだけ小さく区切ったひとまとまりのことば。

小式部／これより／歌よみの／世に／おぼえ／いできにけり。

(　)……ことばとしてこれ以上分けられない最小の単位。

小式部／これ／より／歌よみ／の／世／に／おぼえ／いでき／に／けり。

2 品詞分類

単語の中で、単独で文節となりうるものを(　)といい、単独では文節となれないものを(　)という。

小式部　これ　より　歌よみの　世に　おぼえ　いできにけり。

単語の中には、「小式部」「これ」「より」「歌よみ」「の」「世」「に」「おぼえ」のように、語形が変わらないものと、「いでき(いでく)」「に(ぬ)」「けり」のように用い方によって語形が変わるものがある。語形が変化することを(　)という。

単語は、Ⅰ自立語か付属語か、Ⅱ活用するかしないか、Ⅲ主語・述語・修飾語になるかならないかを基準にして、十種類の(　)に分類される。このようにしてできたのが次の品詞分類表である。

単語	自立語	活用する	単独で述語になる	おもにウ段の音で終わる	①
				おもに「し」で終わる	②
				「なり」「たり」で終わる	③
		活用しない	単語で主語になる		④ 名詞
			主語にならない	体言を修飾する	⑤ 連体詞
				おもに[　]を修飾する	⑥
				接続に用いる	⑦ 接続詞
				独立して用いる	⑧ 感動詞

〈口語〉すべてウ段で言い切る。

「い」で言い切る。

「だ」で言い切る。

文語も口語も性質・用法などはほぼ同じ。

付属語	活用する	⑨
	活用しない	⑩

資料5

〈国語Ⅰ〉古典文法の学習 (二) (　月　日)

―活用と活用形―

1 活用 ―日本語と英語との違い―

○英語の動詞

I am...	I was...
You are...	You were...
He is...	He was...
We are...	We were...

英語の動詞は、(　)(　)(　)などに支配されて語形が変わる。

○日本語の動詞

私はあまり本を読まない。
あなたは本をよく読みますか。
毎日、少しずつでも本を読む。
本を読むことは大切だ。
本を読めば視野が広がる。
だから幅広く本を読め。
よし、きょうから本を読もう。
本を読んだら、感想を書こう。

日本語の動詞は、動詞だけで(　)か、動詞の(　)にどういう語が続くかなどによって語形を変える。この語形変化のことを(　)という。

2 六つの活用形

1 (　)形　文読まず。(読まない)
　　文読まむ。(読もう)
　　文読まば、…。(読むならば)
2 (　)形　文読み始む。(読み始める)
　　文読みて、…。(読んで)
　　文読みけり。(読んだ)
3 (　)形　文読む。(読む)
4 (　)形　文読むこと…。(読むこと)
　　文読むとき、…。(読むとき)
5 (　)形　文読めども、…。(読んでも)
　　文読めば、…。(読むので)
6 (　)形　文読め。(読め)

これを整理すると、「読ま・読み・読む・読め」となる。

ではなぜ、活用形を四つにまとめないのだろうか。

この二つの動詞が(　)つの語形変化をもつので、動詞の活用形の数もそれに合わせて(　)つに決めたのである。

(未)死なば一所で死(未)なな。
(用)死にけむこそあはれなれ。
先立ちて死(止)ぬ。
(体)死ぬることを悲しみて、
多くの人死(已)ぬれば、
(命)死ね。

文語文に用いられている動詞のうち、語形変化が最も多い動詞は、(　)(　)である。

1 四段活用

3 活用形の名称

六つの活用形を、それぞれ「未然形」「連用形」「終止形」「連体形」「已然形」「命令形」のように名付けたのは、次のような事情による。

- 未然形——「ず（打消）」「む（推量）」「ば（仮定）」などの付く形。「未だ然らざる形」
- 連用形——（　）に続く形。（その他、「て（接続）」「けり（過去）」などにも続く。
- 終止形——文を（　）するときの形。（「文読むべし（推量）」のように、「べし」などの語が付くこともある）別名基本形。
- 連体形——「こと」「とき」という（　）に続く形。
- 已然形——「ども（逆接確定）」「ば（順接確定）」などの付く形。「已に然る形」
- 命令形——他に（　）するときの形。

未然形と已然形

雨降らば、道悪からん。（雨が降るならば、道が悪くなるだろう）
⇩
雨は未だ降っていない。

雨降れば、道悪し。（雨が降るので、道が悪い）
⇩
雨は已に降っている。

口語の仮定形と文語の已然形

口語では、「雨が降れば行くまい」の「降れ」は、助詞「ば」に連なって仮定の意を表すので（　）形と呼ぶ。ところが、文語で「雨降れば」という場合は、「雨が降っているから」の意で、已にそうなっていることを表す。そこで文語では、この活用形を（　）形と名付けている。

4 活用表

六つの活用形を整理して、一覧図にすることが考えられた。「読む」は、常に変化しない「読」の部分と、変化する「ま」「み」「む」「む」「め」「め」の部分に分けられる。この変化しない部分、つまり活用しない部分を（　）、活用する部分を（　）という。この活用を図表にすると、次のようになる。

語幹	活用語尾					
読	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	ま	み	む	む	め	め

「咲く」は、活用語尾が「く」であるから、（　）行の動詞である。その活用を調べると、「咲かず」「咲きて」「咲く。」「咲くとき」「咲けども」「咲け」であるから、「カ・キ・ク・ケ」の（　）段に活用していることがわかる。そこで「咲く」は「（　）行（　）段活用」の動詞という。

行	
語幹	
未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

下に付く語

ズ ム バ	
ハ ジ ム テ タ ケ リ リ	
言い切る	
コ ト トキ	
ド モ	
命令の意で言い切る	

。口語で五段活用になるのはなぜか。

それは、未然形に「む」が付いた「咲かむ」が「咲かう」となり、これを「咲こう」と発音するようになったからである。

〈練習〉次の動詞の活用表を完成させよう。

飽く

行	
語幹	
未然形	
連用形	
終止形	
連体形	
已然形	
命令形	

騒ぐ	申す	放つ	思ふ	学ぶ	惜しむ	参る

（以下、ナ変・ラ変・下一段・下二段・上一段・上二段・カ変・サ変活用も同じ形式である）

10 動詞活用の変遷

文語で九種類あった動詞は、口語では五種類に整理統合された。

文語	口語
四段活用（咲く）→	（咲く）
ナ行変格活用（死ぬ）→	（死ぬ）
ラ行変格活用（あり）→	（　）…（　）活用
下一段活用（蹴る）→	（蹴る）
下二段活用（受く）→	（　）……（　）活用
上一段活用（着る）→	（着る）…（　）活用
上二段活用（起く）→	（　）
カ行変格活用（来く）→	（　）……（　）活用
サ行変格活用（為す）→	（　）……（　）活用

11 動詞の活用　まとめ　▼ひらがなの部分は変化しない。

種類＼活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段	ア	イ	ウ	ウ	エ	エ
ナ変	な	に	ぬ			ね
ラ変	ら	り		る	れ	れ
下一段	け	け	ける			
下二段					ウれ	エよ

◎動詞の活用の種類の見分け方

下に付く語	上一段	上二段	カ変	サ変
バムズ				
ハジム テ タリ ケリ				
言い切る	イる			
コト トキ			くる	する
ドモ		ウれ	くれ	すれ
命令の意で言い切る		イよ	こ（よ）	せよ

記憶しておくもの					
上一段	下一段	カ変	サ変	ナ変	ラ変
着る・似る・煮（に）る・干（ひ）る・射る・見る・居（ゐ）る・率（ゐ）る・用（ゐ）る	（一語）	（一語）	（「旅す」などの複合語あり）	（二語）	（四語）

右以外の語は、打消の助動詞「ず」を付ける。

「ず」を付けて	
「ーァず」となるもの ⬇	
「ーィず」となるもの ⬇	
「ーェず」となるもの ⬇	

資料7

〈国語Ⅰ〉古文に親しむ　（　月　日）

十訓抄 (一)

(1)塞翁の故事(2)

1 昔、もろこし(中国)に塞翁といふ者あり。かしこ
2 く強き馬を持ちたり。これを人にも貸し、我
3 も使ひつつ、世を渡る①②たよりにしける程に、
4 この馬、いかがしたりけん、いづちともな(どこまでもわからずに)
5 く、③うせにけり。聞きわたる人、いかばかり(聞き伝えた人が)(どんなにか)
6 嘆くらんとて④とぶらひければ、「⑤悔いず」と(悔いていないことだろう)
7 ばかりいひて、(3)つゆも嘆かざりけり。(中略)(だけ)
8 聞く人、目を驚かしてとふにも、なほ「悔い(やはり)
9 ず」といひて、けしきも変はらず⑮つれなく同
10 じさまに⑯いらへて過ぎけるに、そのころ、⑰に
11 はかに国にいくさおこりて、つはものを集め(戦争)(兵士)(集めな)

(1) とりで近くに住むおじいさん。
(2) 昔から伝わっていること。
(3) つゆ～ざり　少しも～ない。

12 られけるに、国中、さもある者残りなく出で(戦争に行ける者)
13 てみな死ぬ。(さったときに)

資料8

塞翁の故事　課題　一年　（　）組（　　）

一、――線部①～⑰の語について、古語辞典で意味を調べよう。

	文中に出てくる形	辞書に出ている形	意味（辞書に載っている意味をすべて書き出し、本文にふさわしいものに○印をつける）
①	渡る		
②	たより	／	
③	うせ		
④	とぶらひ		
⑤	悔い		
⑮	つれなく	つれなし	
⑯	いらへ		
⑰	にはかに	にはかなり	

二、本文は、結末部分を削除してある。この話の結末を想像して次に書いてみよう。

資料9

〈国語Ⅰ〉古文に親しむ　（　月　日）

平家物語（一）

祇園精舎

○ 下のてびきを参考にしながら、口語訳を完成させよう。

祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。沙羅双樹の花の色は、盛者必衰という（①　　）をあらわしている。（　　）ている人も長くその生活が続くものではなく、（それは）ちょうど（②　　）春の夜の夢のような（③　　）人も結局は滅んで（④　　）。（それは）まったく（⑤　　）風の前に置かれた塵のようなものである。（以下略）

てびき

① 理（ことわり）〔名詞〕

② おごれる人……「る」は完了の助動詞「り」の連体形、「り」は四段活用の已然形に付く。

③ 「春の夜の夢」とはどんな様子をたとえているのか。〔　　〕に補う。

④ たけし〔形容詞〕

⑤ 「ぬ」は何の助動詞か。

⑥ 「風の前の塵」はどんな様子か。

資料10

〈国語Ⅰ〉古典文法の学習（四）（　月　日）

―動詞の音便と係り結びの法則―

1 動詞の音便（おんびん）

天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふるところを知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。

「知らざつしかば」は、本来「知らざりしかば」である。（「ざり」は打消の助動詞「ず」の連用形）ところが、発音をしやすくするために、臨時に「ざり」→「ざつ」という変化が起こった。このように発音の便宜のために一つの語の音が変化することを（　　）という。

音便の種類	例
	泣きて→泣いて　急ぎて→（　　）
	歌ひて→歌うて　読みて→（　　）
	学びて→学んで　進みて→（　　）
	失ひて→失つて　折りて→（　　）

2

係り結びの法則

平朝臣清盛公と申しし人の有様、伝へ承るこそ、心もことばも及ばれね。（「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形）

文は普通、終止形や命令形で言い切りになるから、「心もことばも及ばれ（　）」となるはずである。ところが、文中に係助詞の「ぞ・なむ・や・か・こそ」があると、文末を次のように結ぶ。

ぞ・なむ（強意）
や・か（疑問・反語）（ヤ、カ。）（イヤ…。）　→（　　）形で結ぶ。
こそ（強意）　→（　　）形で結ぶ。

これを（　　）という。

〈例〉今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さかきの造（みやつこ）となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。

資料11

〈国語Ⅰ〉古文に親しむ　（　月　日）　氏名（　　）

平家物語（二）

忠度の都落ち　予習プリント

○ 次の語の意味を古語辞典で調べ、あとの問いについてまとめておこう。

p・25 おはす―
　合ふ―
　のたまふ―
　細―
　子候（さうらふ）―
　申す―
　苦し―

p・26 哀れなり―
　年ごろ―
　おろかなり―
　しかしながら―
　あひだ―

（以下、「やがて・奉る・賜る・ゆめゆめ・情け・哀れ・かばね・浮き世・さらば・いとま・いとど・名残・おぼゆ・故郷・恨めし」を調べる語として挙げた。）

問一　忠度は落人であるが、危険を冒してまで俊成を訪ねた目的は何か。

資料12

〈国語Ⅰ〉古文に親しむ　（　月　日）

平家物語　㈢

木曽の最期

今井の四郎、木曽殿、主従二騎になって宣ひけるは、「①日来はなにともおぼえぬ鎧が今日は重うなッたるぞや」。今井四郎申しけるは、「②御身もいまだつかれさせ給はず。御馬もよわり候はず。なににによってか、一両の御着背長を重うはおぼしめし候べき。それは御方に御勢が候はねば、③臆病でこそさはおぼしめし候へ。兼平一人候とも、余の武者千騎とおぼしめせ。矢七つ八つ候へば、しばらくふせぎ矢仕らん。あれに見え候、粟津の松原と申す、あの松の中で御自害候へ」とて、うッてゆく程に、又あら手の武者五十騎ばかり出できたり。「君はあの松原へいらせ給へ。兼平は此敵ふせぎ候はん」と申しければ、木曽殿宣ひけるは、「④義仲都にていかにもなるべかりつるが、これまでのがれくるは、汝と一所で死なんと思ふ為なり。所々でうたれんよりも、一所でこそ打死をもせめ」とて、馬の鼻をならべてかけむとし給へば、⑤今井四郎馬よりとびおり、主の馬

問二　俊成は忠度の訪問に対して、どのような思いを抱いているか。

今井の四郎と木曽殿と主従二騎になって、木曽殿が言われるには、「これまではなんとも思われない鎧が今日は重くなったぞ」。今井四郎の申すには、「お体もまだお疲れになってはおりません。御馬も弱っておりません。どうして一領の着背長を重くお思いになることがありましょうか。そのように弱気になられるのは味方に兵力がありませんので気おくれからそんなにお思いになるのでしょう。兼平一人がおりましても、他の武者千騎とお思いになってください。矢が七、八本ありますので、しばらく防ぎ矢をいたしましょう。あそこに見えますのが、粟津の松原と申しますが、あの松の中でご自害なさいませ」といって、馬を急がせてゆくうちに、また、新手の武者が五十騎ほど出て来た。「殿はあの松原におはいりください。兼平はこの敵を防ぎましょう」と申したので、木曽殿の言われるに

〈調べる語〉

おぼしめす

つかまつる

敵

の口にとりついて申しけるは、「弓矢とりは年来日来いかなる高名候へども、最後の時不覚しつれば、ながき疵にて候なり。⑤御身はつかれさせ給ひて候。つづく勢は候はず。敵におしへだてられ、いふかひなき人の郎等にくみおとされさせ給ひて、うたれさせ給ひなば、『さばかり日本国にきこえさせ給ひつる木曽殿をば、それがしが郎等のうち奉ッたる』なンど申さん事こそ口惜しう候へ。ただあの松原へいらせ給へ」と申しければ、

⑭木曽、「さらば」とて、粟津の松原へぞかけ給ふ。

⑦今井四郎只一騎、五十騎ばかりが中へかけ入り、鎧ふンばりたちあがり、大音声あげてなのりけるは、「日来は音にも聞きつらん、今は目にも見給へ。木曽殿の御めのと子、今井の四郎兼平、生年卅三にまかりなる。さる者ありとは、鎌倉殿までも⑧しろしめされたるらんぞ。兼平うッて見参にいれよ」とて、射のこしたる八すぢの矢を、さしつめ引きつめ、さんざ〜に射る。

（中略）

は、「義仲は都で最後の合戦をするべきだったのが、ここまで逃げて来たのは、お前と同じ所で死のうと思うためである。別々の所で討たれるよりも、同じ所で討死にをしよう」といって、馬の鼻を並べて駆けようとなさると、今井四郎は馬から飛び降り、主君の馬の口にとりついて申したのは、「弓矢をとる者はどんなに長い間どのように立派な手柄がありましても、最期の時に不覚をすると、長い間の瑕となるものです。お体はお疲れになっています。後続の味方の兵はありません。敵に間を押し隔てられ、つまらぬ人の家来に組み、馬から落とされて、お討たれになれば、『あれほど日本国で有名でいられた木曽殿を、誰それの家来が討ち申した』などと人が申すなら、それが残念です。ただ、あの松原におはいりください」と申したので、木曽は、「それならば」といって、粟津の松原へ馬を走らせて行かれる。

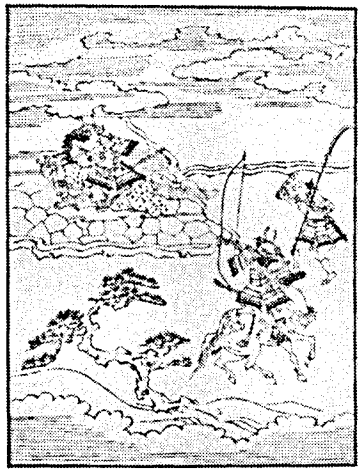
今井四郎はたった一騎で、五十騎ほどの中に駆け入り、鎧を踏んばって立ち上がり、大声をあげて名のるには、「日頃は話にも聞いていただろう、今はよくも御覧あれ。木曽殿の御乳母子、今井の四郎兼平、生年三十三歳になる。そういう者がいるとは鎌倉殿までもご存じであろうぞ。兼平を討って鎌倉殿に御覧にいれ

高名

言ふかひなし

聞こゆ

口惜し



15

10

5

⑥今井がゆく丞のおぼつかなさに、ふりあふぎ給へる内甲を、三浦石田の次郎為久おッかかッてよッぴいてひやうふっと射る。いた手なれば、まッかうを馬の頭にあててつぶし給へる処に、石

ろ」といって、射残した八本の矢を、弓につがえては引き、つがえては引き、矢つぎばやにさんざんに射る。（中略）

今井の行方が気がかりなので、振り向き上を向いた甲の内側を、三浦石田の次郎為久が追いついて、弓をよく引いて矢をひょうと射ればふっと射抜いた。深傷なので、甲の鉢の前面を馬の頭にあてててうつぶされたところに、石田の郎等二人がその場に到着して、とうとう木曽殿の首をとってしまった。太刀の先に貫いて高く差し上げ、大声をあげて、「この日頃日本国に知れわたっておられた木曽殿を、三浦の石田の次郎為久がお討ち申したぞ」と名のったので、今井四郎は戦っていたが、これを聞いて、「これからは誰をかばうために戦おうか、その必要もない。これを御覧なされ、東国の殿

おぼつかなし

田が郎等二人落ちあうて、つひに木曽殿の頸をばとッてンげり。太刀のさきにつらぬきたかくさしあげ、大音声をあげて、「此日ごろ日本国に聞えさせ給ひつる木曽をば、三浦の石田の次郎為久がうち奉ッたるぞや」となのりければ、今井四郎いくさしけるが、これを聞き、「今は誰をかばはむとてかいくさをもすべき。これを見給へ、東国の殿原、日本一の剛の者の自害する手本」とて、太刀のさきを口にふくみ、馬よりさかさまにとび落ち、つらぬかッてぞうせにける。さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。

（小学館日本古典文学全集「平家物語二」）

○ 義仲と今井はどういう間柄か。それがわかる語を二つ抜き出してみよう。

（　　）（　　）

資料13

木曽の最期　学習プリント　（　）組（　）番

氏名（　　）

○「木曽の最期」を読んで、義仲と今井の会話や行動にどのような気持ちが表れているか考えてみよう。

方、日本一の剛の者の自害する手本だ」といって、太刀の先を口にくわえ、馬から飛んでさかさまに落ち、太刀に貫かれるようにして死んでしまった。こうして、粟津の合戦というものはなかったのだ。

木曽義仲（――）	今井四郎（～～～～～）
①	①
	②
	③

資料14

〈国語Ⅰ〉木曽の最期　班学習まとめ　（一年一組）

④	③		②		
⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④

義仲

① 今まで負けたことがなかったので、よけい弱気になり、気力が薄れている。（一班）気が重い。（二・四・八班）先が思いやられる。（三班）二人きりになって、鎧の重さとともに生の重さを感じている。（五班）心細い。（七班）義仲のぐち。

② 今井とは固い主従関係で結ばれているので見殺しにはできない。（二班）これまで忠実に仕えてくれた今井といっしょに立派な最期を遂げたい。（二班）一緒に死のうという家来を思う気持ち。（三班）どうせ死ぬなら今井と死にたい。（四・五・七・八班）一人で死ぬのは心細い。今井を信頼。

③ 今井の言葉に納得したが、死ぬ時は一緒に死にたいと思っていた。（一班）武士として死ぬなら自害したい。（二班）自分のためにも今井のためにも松原に行こう。（三班）こんなに自分を思ってくれているのか。自害するまで頼んだぞ。（四班）今井にすまないと思いつつ、納得。（五班）潔く別れたが心細い。（六班）今まで自分のために死んでいった人を思い、自分は一門の名誉を守るべきだ。（七班）本当はさみしいが、それを隠している複雑な思い。（八班）

④ 今井の無事を祈る。（一班）自分を守ってくれてすまない。（二班）心配する気持ち。（三・四・七・八班）

① 義仲を励ましている。（一・二・四・六・七・八班）なぐさめる気持ち。（三班）元気づけようとしている。（五班）

② 自分も不安だが、自分を頼りにしてほしい。（一班）義仲に潔く自害してもらいたい。（二・五・七班）義仲を最後まで守ろう。（三・四・六・八班）

③ 追って来た敵から義仲を守ろうとしている。義仲に潔く自

害してもらいたいので。（一・二・三・五・六班）義仲に恥をかかせたくない。（四・七班）自分は死んでも、主人を防ぎ守りたい。（八班）

④ どんなことをしてでも義仲を守りたい。（一・八班）義仲が自分のことをそんなに思ってくれるのは嬉しいが、自分といっしょに戦わせるわけにはいかないという気持ち。（二班）どうしても自分の願いを聞いてもらいたい。（三班）義仲の言葉にあわてた。（四班）ここまで来たかいがないので、早く一人で自害してほしい。（五班）どうしても義仲を逃がして、立派な自害をしてもらおう。（七班）

⑤ 無理をせず、逃げてほしい。（一班）義仲に戦う気を失わせ、自害する気持ちになってもらおう。（二班）疲れているのだから、もう戦わないでほしい。（三班）いたわり。（四班）早く自害してほしいので説得。（五班）（七・八班）

⑥ つまらない敵に討たれてしまうより、自害して名誉を守ってほしい。（一・四・五・六・八班）死んでからも義仲は立派な武士であったと言われてほしい。（二班）こんなところでやられたのでは残念でしかたない。（三班）一門の恥ともなる。（七班）

⑦ 相手の注意をひきつけ、義仲をかばい戦うことを決意する。（一・四・七・八班）最後の仕事を立派にやりとげよう。（二班）自分は恐くもないし、おそれてもないのだ、という強気な気持ち。（三班）たとえ何があってもここは通さないという決意。（五班）気迫。

⑧ 死の覚悟。（一班）時間かせぎをしたい気持ち。（二・五班）残り八本の矢で何人も殺してやる。殿には近づけたくない。自分はどうでもよい。（三班）義仲を死にものぐるいで守りたい。（四班）自分が守るしかない。八本の矢すべてを敵にあてよう。どうしても守らねばならぬ。（七班）つらいけれども主人を守るためにがんばって戦おう。（八班）がむしゃら。主従関係を全うしたい。

⑨ 義仲が死んだ今、生きていても仕方がないので、武士らしく自害する。（一・三・七・八班）主人のあとを追って死のうという気持ち。（二班）義仲に本当に尽くしてきたという誇り（三・四班）

今井

資料15

〈国語Ⅰ〉古典文法の学習（㊤）（　月　日）

―補助動詞と敬語―

1 補助動詞

(イ) 本を見る。
(ロ) 本を読んでみる。

(イ) 庭に、小鳥が居る。
(ロ) 小鳥が鳴いている。

口語にも、(イ)の「見る」「居る」のような自立語としての（　）と、(ロ)の「～みる」「～いる」のような（　）とがある。（　）は、形は（　）と同じであっても、自立性を失

い、助動詞のように用いられる。

文語の例を次に挙げてみると、

(イ) 三位殿に（申シアゲル）べきことあって、忠度が帰り参つて候ふ。（25ページ）

(ロ) その人ならば苦しかるまじ。入れ（申シアゲル）。（25ページ）

(イ) 別の子細（ゴザイマス）ず。（25ページ）

(ロ) 一門の運命はや尽き（マス）ぬ。（26ページ）

(イ) 鎧の引き合はせより取りいでて、俊成卿に（サシアゲル）。（27ページ）

(ロ) 木曽殿をば、三浦の石田の次郎為久が討ち（申シアゲル）たるぞや。（32ページ）

などがある。右の例の(イ)が（　　）、(ロ)が（　　）である。

2 敬語

敬語には、次の三種類がある。

① （　　）語……話し手（作者）が、動作をする人に敬意を表すもの。
〔動詞〕おはす、のたまふ、おぼしめす。
〔補助動詞〕給ふ。

② （　　）語……話し手（作者）が動作をする人を低める形にして、動作を受ける相手に間接的に敬意を表すもの。
〔動詞〕申す、聞こゆ、奉る。〔補助動詞〕同上。

③ （　　）語……話し手（作者）が、聞き手（読者）に対して敬意を表すもの。
〔動詞〕候ふ、侍り。〔補助動詞〕同上。

今井四郎、木曽殿、主従二騎になってのたまひけるは、「日ごろは何ともおぼえぬ鎧が今日は重うなつたるぞや」。今井四郎申しけるは、……。（「木曽の最期」）

右の文中、木曽殿の動作には「（　　）」の（　　）語「のたまふ」、今井四郎の動作には「（　　）」の（　　）語「申す」が用いられている。前者は、（　　）の（　　）に対する敬意を表し、後者は、（　　）が（　　）を低めて間接的に（　　）に対する敬意を表したものである。

資料16

〈国語Ⅰ〉古典文法の学習 (六)　（　月　日）

— 形容詞と形容動詞の活用 —

1 形容詞の活用

「平家物語」（教科書25～34ページ）の中に用いられている形容詞を抜き出してみた。

1、その人ならば苦しかる（形）まじ。（→ラ変型の活用語には（　　）形に付く。）

2、やがて世の乱れいでてきて、その沙汰なく（形）候ふ条（形用言）……。

3、草の陰にても、うれし（形）と存じ候はば、（形を受ける。）

4、遠き（形体言）御守りでこそ候はんずれ。

5、子細に及ばずと言ひながら、恨めしかり（形）し（→過去の助動詞「き」の連体形）ことどもなり。

6、最期のとき不覚しつれば、長き疵（形・体言）にて候ふなり。
7、言ふかひなき（形・体言）人の郎等に組み落とされさせ給ひて、……。
8、これに馳せ合ひ、切つて回るに、面を合はする者ぞなき（係助詞・形）。
9、鎧よけれ（形十「ば」→なので）ば裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。
10、太刀の先に貫き高く（形）さし上げ（用言）、……。
11、さてこそ粟津のいくさはなかりけれ（係助詞・形）。
12、おごれる人も久しからず（形）、ただ春の夜の夢のごとし。
13、たけき（形・体言）者もつひには滅びぬ、……。
14、遠く（形）異朝をとぶらへば（用言）、……。
15、近く（形）本朝をうかがふに、……。

これらを整理してみると、次のような活用表になる。

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
遠	く	（　）	（　）	（　）	（　）	
	（　）	（　）	し	（　）	（　）	
					け	れ
						か
						れ

右は、形容詞の活用のうち「（　）」と呼ばれるものであるが、もう一つ次のような「（　）」がある。

う	しく	しく	し	しき	しけれ	しかれ
れ	しから	しかり		しかる		

○活用の見分け方

動詞「なる」や助詞「て」を付けてみる。

～くなる（深くなる、強くなる、よくなる　など）
→（　　）

～しくなる（悲しくなる、激しくなる、うつくしくなるなど）→（　　）

次の例は、形容詞の音便形である。もとの形に戻してみよう。

1、さてもただ今の御渡りこそ、情けも優れて深う（　）、哀れもことに思ひ知られて、感涙抑へがたう候へ。
2、俊成卿いとど名残惜しう（　）おぼえて、……。
3、日ごろは何ともおぼえぬ鎧が今日は重う（　）なつたるぞや。

（形容動詞の活用は略）

（広島県立安古市高等学校教諭）